

2

発達障害と愛着障害を 見分けるポイント

★発達障害と愛着障害の関係

ここでは、愛着障害を「現場で正しく理解し、見つける」ためのポイントを確認していきたい
と思います。

愛着障害はその行動特徴が発達障害とよく似ている部分があるために、その違いが理解されず、
適切な支援につながらない場合がよくあります。発達障害の専門家はたくさんおられますが、愛
着障害の専門家はきわめて少ないことが、適切な子ども理解を妨げている原因の一つでもありま
す。

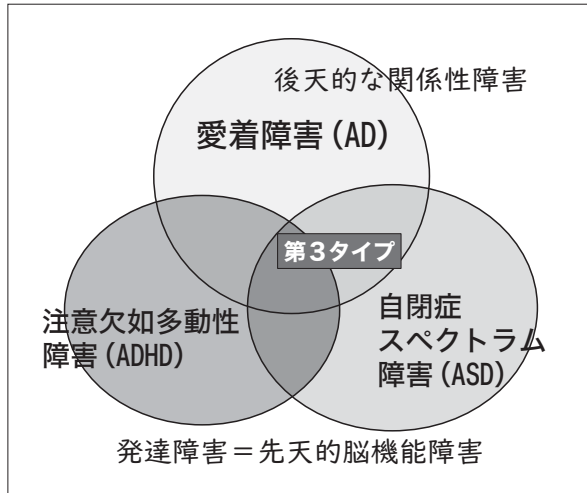
発達障害と愛着障害の違いと関係を図2に表しました。

発達障害は先天的な子どもの脳機能障害であり、生まれつき持っている特性の問題であるのに

★ 発達障害と愛着障害を見分ける四つのポイント

これらのこと意識しながら、現場だからこそできる、よく似た行動からその違いを見つけるポイントを三つ、確認してみましょう。まず現場で、気になることを的確に理解し、こどもの

図2 発達障害と愛着障害の関係



対して、愛着障害はこどもとかわる特定の人との後天的な関係性の障害です。この違いを踏まえることが大切です。発達障害と愛着障害とは、その行動の問題の原因になっていることの働きが違います。

そして、大切なのは、図示したように、先天的な脳障害を持って生まれたてきた発達障害のこどもが、後天的に関係性障害である愛着障害を併せ持つことは、当然ありえるということです。第1章③で後述するように、愛着障害の支援では、発達障害と愛着障害を併せ持つこどもがいるという理解が絶対必要なのです。

抱えている問題をきちんと把握することが、その子に合った支援をするためには必要です。

ポイントその1…多動

まず、落ち着きなく動き回る「多動」という特徴は、注意欠如多動性障害（ADHD）、自閉症スペクトラム障害（ASD）という発達障害でも、愛着障害（AD）でも見られます。ところがADHDの多動性障害という名称に引っぱられて、多動の特徴があればすべてADHDとイコールで結びつける誤解がまだ多く見られます。

現場での多動の現れ方を見ると、行動の問題として起こるADHDの多動は、「気づく」という認知機能や気持ち・感情の機能とは無関係に起こることがわかります。場所や状況、作業が変われば、当然、見えたり聞こえたりするもの、つまり認知が変わり、それに対する好き嫌い等の感情が変わりますが、ADHDの多動の現れ方はそれらに影響されず、「いつも」多動であることで確認できます。

ASDの多動は、「ここにいい」「これをしていけばいい」と受け止める居場所感の欠如が原因です。ですから、居場所感があるときは落ち着いています。居場所感がいきなり剥奪される（例えば、読書の時間が終わったからと、まだ本を途中までしか読んでいないのに本を取り上げられる）、あるいは、居場所感が見つからない（例えば、いきなりの時間割変更で体育の授業となり体育館につれていかれるというような、予定変更で場所移動を強いられる）という場合には、多動になってしまうのです。

愛着障害の場合は、非常に変わりやすい感情が多動の原因となっているため、多動であったりなかったりと、「ムラのある」多動が特徴です。ネガティブな感情が多くある場合や、ポジティブな感情があり余っている興奮状態のときは多動となりますが、ほどよいポジティブな感情がある場合は落ち着いているように見えます。

ポイントその2…片付けができない、ルールが守れないように見える

「片付けができないように見える」現象は、ADHDでも、愛着障害でも見られますが、やはりその原因が違うのです。

「片付けができないように見える」というまわりくどい言い方をしたのは、ADHDの場合は、実行機能・遂行機能の問題があるために、「片付ける」という一連のいくつかの行動を最後まで行うのが困難で、「片付ける」行動がなかなか身につかず、「片付けられない」という現象につながるからです。この場合は、「片付ける」行動を細かい行動に分解し、スモールステップで行動支援をしていけば、できるようになっていきます。

しかし、愛着障害の場合は、このような支援ではまったく効果が見られません。それは、愛着障害は「片付けたほうが気持ちがいい」という感情、「片付けたい・片付けよう」という意欲が育っていないことが原因だからです。だから、「今日はできたとしても刹那的で、次の日にはまったくできない」ということになりやすく、教師として指導・支援していても、こどもの成長として積み上がっていく感覚がまったく持てない理由はここにあるのです。ここでも、行動の問題なの

か感情の問題なのかというところが大切となります。また、意欲の問題は本章□で触れた探索基地の問題でもあります。

「ルールを守るといって規範行動ができないように見える」場合も同じです。ADHDではルールを守らなければならないという遵守意識はちゃんとありますが、衝動性や行動制御の問題から、規範逸脱行動としてルールを守れない行動をしてしまいます。愛着障害では、「ルールを守ればどんなポジティブな感情になるか」がわからない、つまり「ルールを守ろう」という意欲そのものが育っていないのです。そして、感情コントロールの難しさから、規範逸脱行動が頻発するので

ポイントその3: 「取り上げない」「無視する」対応をしてみてもわかる特徴の違い

これは支援の違いのポイントにもなるのですが、こどもが不適切な行動をした場合、その行動に対して反応せず、「取り上げない」「無視する」対応をしてみたその効果で、ADHDと愛着障害を峻別することができます。

行動の問題であるADHDの場合は、発生した行動を強化しない、つまり、その行動に何らかの反応をして報酬を与えなければ、その行動は消去され、消滅していくのです。ですから、「取り上げない」「無視する」という対応は、ADHDの場合には有効です。

しかし、愛着障害の不適切な行動は、感情の問題から来ています。ですから、「取り上げない」「無視する」という対応は、自分の感情をわかってくれないという思いを誘発してしまい、その感

情を逆なですることになります。そしてこの感情は、「こっちを向いてほしい」という注目された
いアピール感情を含んでいることが多く、「取り上げない」「無視する」対応をされると、もつと
注目されたくていろいろな不適切行動がかえって増えてしまうのです。

この「取り上げない」「無視する」対応を、愛着障害の子どもにもするよう強いる間違ったアド
バイスによく出会います。成果が出ないと、「やり方がよくない」などと支援者が責められたりし
ています。筆者は専門家として、このアドバイスは残念でなりません。

ポイントその4…集団か二人きりか等、対人場面の違いによって特徴の現れ方が変わるか？

愛着障害は特定の人との絆の問題ですから、ある特定の人との関係が意識しにくい集団場面で
その特徴が現れやすくなります。逆に特定の人との関係を意識しやすい場面、例えば、教師や大
人ともどもが二人きりとなる一対一の状況では現れにくいのです。

それに対して、ADHDは他者との関係性の障害ではないため、場面の違い、対人関係の違い、
集団か一対一か等によって違いは見られないのです。

このポイントも、現場で子どもとかわかる人ほど実感しやすい、わかりやすい見分けのポイン
トとなります。